

庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー

——英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生——

橘 セ ツ

キーワード：ライフヒストリー／ライフジオグラフィー、レジナルド・ファラー、日本庭園、ロックガーデン、環境、ハイブリッド

I はじめに

(i) 英国人植物学者レジナルド・ファラー

レジナルド・ファラー Reginald Farrer (1880–1920) は、1880年にイングランド北部、ヨークシャーのクラップム Clapham 村のイングルボロー屋敷 Ingleborough Hall に生まれた。レジナルド・ファラーより4世代前のジェームズ・ファラー (1751–1820) が、1782年にイングルボロー屋敷の地所を購入して以来、現在まで、イングルボロー屋敷の地所は、ファラー家の管理する土地となっている。

レジナルド・ファラーは、身体に軽度の障がいがあったため、オックスフォード大学に進学するまでの幼少時代は家庭で教育を受けた。彼は、小さいときから、近隣のヨークシャーデールの野山を自由に走り回り、植物採集を行った。

彼の故郷ヨークシャーデールの地質は、石灰岩を含んだ地層と含まない地層が複雑にからみあっており、それが植物生態学的に豊かで多様な植生の渓谷をつくりだしていた。標高の高い部分の地層は、ミルストーン・グリット Millstone Grit¹⁾ と呼ばれ、植生は限られた2～3種類である。場所によっては、長期にわたって酸性雨を浴びたためにミルストーン・グリットが浸食され、その下に走っている石灰岩のヨーデイル・ライムストーン Yoredale limestone と呼ばれる地層が露出した。そのような地質的な環境が、豊かな高山植物 alpine plants を育てていた。(Roberts, 1991)

ファラーが幼少時から行った植物採集は、専門的で、彼が、作成した植物のカタログのうちのいくつかは、新種であった。彼は、採集した高山植物を庭に植えるために、高山植物の生育環境を模



写真1：「レジナルド・ファラーのポートレート」出典：John Illingworth & Jane Routh eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster

倣した岩石の組み合わせから構成されるロックガーデン造りに魅力を感じた。彼が、はじめて創作したロックガーデンは、14歳の時に自宅であるイングルボロー屋敷の庭に造ったものである。

オックスフォード大学ベルリオールカレッジに進学してから、彼は高山植物とロックガーデンに熱中する仲間をみつけた。ヘンリー・ジェラルディン・ビッター Henry Jardine Bidder 牧師、セントジョンズカレッジの経理部長である。ファラーは、ビッター牧師を助けてセントジョンズカレッジの庭にロックガーデンを創作するのを手伝った。オックスフォードではファラーは生涯つきあうことになる多くの友人に恵まれた。

オックスフォード大学を1902年に卒業してからは、1903年に日本など極東地方を旅行したのを皮切りに、植物採集を目的とした東洋への旅行に多く出かけた。1908年に、スリランカのセイロン島を訪れたファラーは、植物採集に夢中になるとともに、仏教に傾倒して、この頃には、彼は仏教徒になったといわれている。(Farrer, 1908; Lievre, 1991)

彼は、植物採集旅行から故郷に帰ってくると、文芸雑誌や園芸雑誌に寄稿し、旅行記・園芸実用書など多くの著作を執筆し刊行した。一方、彼は、植物採集旅行で採集した植物を販売するために園芸商、クラヴァン・ナーサリー Craven Nursery をイングルボロー屋敷の地所で経営した。また、イングルボロー屋敷の地所ではロックガーデン造りに励んだ。1910年頃から、ファラーは、ガーデン・ライターとして英国の園芸界に知られるようになってきた。

1910年に、ファラーは、ヨーロッパの山岳地帯であるフランス、イタリアのアルプスを旅行した。この旅行について、ファラーは、2冊の本、『山岳に囲まれて』*Among the Hills* (1911)、『ドロミテ渓谷』*The Dolomites* (1913) を執筆、刊行した。

ファラーの植物採集仲間ファラーについての著作も書いているユアン・コックス Euan Cox は、ファラーのヨーロッパ・アルプスについての著作は、その後に続く東洋での植物採集の練習期間にすぎない、と述べる。その後の10年間、ファラーは、中国ヒマラヤ地方、甘粛、チベットなどアジアの山岳地方を訪れ、高山植物の採集に本格的に打ち込んだ。

ファラーは、高山植物の採集旅行に出かけるたびに、採集した高山植物の植物画を水彩で描いた。彼の描く植物画は、植物の形態的な特徴を精確にとらえるとともに、その植物が生育している環境をも描き込んでいる点に特徴があった。1918年には、ファラーは、ロンドンの美術協会 Fine Art Society で、200点以上もの水彩の植物画の展覧会を行った。

レジナルド・ファラーが亡くなったのは、1920年にビルマ（現在ミャンマー）高地で高山植物の採集旅行の最中だった。彼は、辺境の地で長雨の中にもかかわらず、精力的に植物採集を続けるうち、高熱を出して亡くなった。ファラーが雇ったのは、ジフテ



写真2：「レジナルド・ファラーの植物水彩画・サクラソウの一種 *Primula cycliophylla*」出典：Fisher, F.H. (1932) 'Reginald Farrer, author, traveler, botanist and flower painter' *Alpine Garden Society's Bulletin* 1-10 (1-38)

リアであろうと後に推測されている。40歳の生涯であった。ファラーは多才な面を持っていた。「著述家、旅行家、植物学者そして植物画家」これは、故郷イングルボロー屋敷の庭に家族がたてたファラーの記念碑にしるされた言葉である。(Fisher, 1932; Stearn, 1991)

(ii) 「ライフヒストリー／ライフジオグラフィー」の視点

近年の文化地理学では、ライフヒストリーや伝記研究と地理学との間の重なり合う部分が注目され見直されている。(Daniels and Nash, 2004) 個人のライフヒストリーや伝記で語られるのは個人の生きてきた場所や空間であり、個人が生きてきた風景である。個人は、どのように風景を見て、記述し、創造に関わってきたのか、どのような理想の風景を夢見てきたのか。「ライフヒストリー／ライフジオグラフィー」は、彼／彼女が、実際に目にして、その中に生き、語り、創造しようとした風景の側からアプローチして彼／彼女の人生と彼／彼女が生きた時代と社会を照らし出そうという方法である。その作業によって、彼／彼女の生きた時代と社会の文脈に彼／彼女の人生を明確に位置づけることができると考えられる。

レジナルド・ファラーは、確かに、20世紀初期の英国の園芸の世界で、非凡な才能を示した希有な人物であった。しかし、また同時に、英国人のプラント・コレクターとして世界の多くの地域で、園芸商のために商業的な植物採集旅行を行った点で、ジョン・グールド・ヴィーチやロバート・フォーチュンなどの先駆者の後継者ともいえるような系譜をひいていると考えられる。この点から、ファラーの植物採集旅行は英国の植物学者として伝統的であったと考えられる。また、ファラーが魅了されたロックガーデンという庭園様式の基盤にある、山岳地帯と高山植物へ対する強い憧れも、ファラーが個人的に一人で持ち続けていた関心ではなく、当時の社会で共有されつつある流れだった。

ファラーの生きた20世紀の初めは、ヨーロッパ・アルプスなどの山岳地帯は、危険な秘境として探検されるだけでなく、スポーツとしての登山が流行したり、美しい風景の山岳リゾートとしてヨーロッパの富裕な層にツーリズムの対象として受け入れられつつある時代でもあった。(レシェブルク、1999；小泉、2001)

次に続くⅡ章では、レジナルド・ファラーが初めて行った東洋への旅である日本旅行に焦点を当てる。ファラーの人生を通しての園芸活動に、ファラーが大学卒業直後に行った日本旅行での経験は、生涯を通して彼にインパクトを与え続けていたと、考えられるからである。次に、Ⅲ章では、ファラーが夢中になったロックガーデンという英国のガーデニングの一潮流が歴史的に、どのような流れの中に位置づけられるのか考察する。Ⅳ章では、ファラーが執筆した旅行記や園芸実用書の記述と、彼の故郷であるイングルボロー屋敷の地所でレジナルド・ファラー自身が試みた環境管理の方法を現地調査によって考察する。本稿では、これらの作業を通してレジナルド・ファラーの環境観に迫ることを目的とする。

II レジナルド・ファラーの日本旅行

(i) はじめに：ファラーの時代の英国人の日本旅行

レジナルド・ファラーは、1902年12月にはじめて日本に到着した。ファラーは、翌1903年に日本、韓国、中国を含む極東を旅行した。ちょうどその頃、ファラーのオックスフォード大学ペルリオルカレッジ時代の友人、オーブリー・ハーバート Aubrey Herbert は、外交官として英国大使館で東京勤務をはじめたばかりであった。ファラーが日本滞在している間、ハーバートを訪ねて多くのオックスフォード大学時代の友人が日本を訪問した。そのような友人たちとの交遊関係の中にファラーの日本滞在は支えられていた。後にアラビア問題専門家の国会議員として有名になるオーブリー・ハーバートについての伝記を執筆したマーガレット・フィッツハーバートによると、ファラーが日本へやって来た目的は「植物採集」と明記されている。(Fitzherbert, 1983: 33)

1860年代に日本が、鎖国を解き、世界に向かって開国したとき以来、南北に細長く、かつ標高の高い山地のある日本は植物の種類が豊富であり、園芸が盛んで、日本庭園が美しいことは英国でもよく知られていた。特に、1860年に日本を訪れた2人の英国人植物学者でプラント・コレクター——ロバート・フォーチュンとジョン・グールド・ヴィーチ——の採集した植物は、英国の園芸愛好家たちの間でよく知られ、英国に広く販売されていた。1860年代以降、英国のプラント・コレクターたちが、好んで日本から持ち帰った植物は、英国の屋外でも越冬できる耐寒性を備えたアオキなどの常緑の装飾植物、コウヤマキやカラマツなどの針葉樹、ツバキ、ユリなどの園芸花卉植物など多岐にわたっている。(白幡、1994; Tachibana, 2000など)

ファラーは日本国内では東京、日光、北海道、東北(松島)、鎌倉、江ノ島、伊香保、軽井沢、富士山、箱根、熱海などを訪れている。この旅行コースは、当時日本に寄港した世界漫遊旅行者の日本観光コースを踏襲していると考えられる。この日本滞在について、ファラーは、文芸雑誌『マクミランズ・マガジン』や『19世紀とその後』に寄稿した。ファラーは、その後、その原稿に大幅に加筆して旅行記として刊行しようとした理由を「マニュアルやガイドブックが提供しようとしてきたような日本ではなくて、私が目に見たまま、感じたままの日本について表明したい」(Farrer, 1904: x)と説明している。1903年の日本は、英語で書かれた外国人旅行者用の日本旅行のガイドブックも整い、日本についての名作旅行記がすでにたくさん刊行され、あふれていた時代である。²⁾

ファラーが「見たまま、感じたままの日本」を描くために、焦点を合わせたのは、彼が日本で出会って感銘を受けた日本庭園だった。ファラーは、とくに東京で目にした日本庭園に刺激を受け、日本庭園の印象を中心とする旅行記『アジアの庭：日本の印象』*The Garden of Asia: Impressions from Japan* (1904)を旅行の翌年には刊行した。ファラーは、大名庭園、園芸商の庭園など英国人たちによく知られていた庭園から、典型的な民家の慎ましやかな庭まで観察して、それまで世界漫遊旅行者の見なかった、あるいは、見落としていた日本の側面を探し出して描いた。

(ii) ファラーの感銘を受けた日本庭園

彼は、大きな有名な庭園だけではなく、東京で目にした一般の人びとが住む家にみられる「3ヤード四方の」小さな庭について次のように記している。

この小さな庭は、水の流れや橋やその他日本庭園におなじみの道具類一切を必要としなかった。しかし、それは、完璧だった。そこにあったのは、ツツジの小さなかたまりと、岩石の効果によってみんな太古からそこにあるように見える苔むした石たち。そこから、シダ類やユキノシタや草のしげみが顔をのぞかせ、すてきなサザンカの木が大量のドッグローズのように見えるローズピンクの花を咲かせていた。(Farrer, 1904: 15 以下、引用文の日本語訳は全て筆者による)

最も、ファラーが興味深かったことは、このような庭があったという間に出来上がる過程を目撃したことである。ファラーは、手入れの行き届いていなかった宿の庭を、植木屋に頼んで、造り替えてもらったのだ。植木屋は、成熟した木々と灌木を背景に置き、庭石を配置し、そこに注意深くより小さな植物を植えた。ファラーは、この庭に置かれた岩石は、ある特定の川から採取した高価な「貴重な石」であるが、「訓練されていない目」には、「ただの石」のように見えると解説する。ファラーは、「本物の庭師は、謙虚であり自然のいいなりである」と評する。続いて、ファラーは、日本庭園の印象を庭石の配置に焦点を当て「日本庭園は、花よりも石のパラダイスである。もし、花が咲けば、よしとしよう、しかし、そこに灌木を植えているのは、花を見たいからではなくて、庭石を配列した時の2本のラインを際立たせる効果をねらって植えているのだ。……よい日本庭園とは、ある風景を再現するような完璧なサイズとカタチで配列した岩々のあるところ」(Farrer, 1904: p.22-23) だと述べている。

(iii) 高山植物が豊富な日本

もう一つ、ファラーが日本で発見したのは、日本の高山植物の豊富さであった。日本では、自然の野山に高山植物を採集に行かなくても、園芸品種として、多くが栽培されている。日本では、高山植物は、山野草と呼ばれて、庭に園芸植物として植えられていた。ファラーは、富士山などの山でも、ホテイアツモリなどの高山植物を採集したが、ファラーが、もっとも興奮した高山植物との出会いのひとつは、東京の夜店の花売りの屋台だった。ファラーは、「東京の通りの真ん中で、出会ったのは紛れもなく高山植物だ」(Farrer, 1907: 234) と驚き、すぐさま屋台に満載された高山植物全部を買い取って宿に配達させた。この興味深い話を、ファラーは、1907年に刊行し、最も版を重ねて売れた本である『私のロックガーデン』*My rock-garden* (1907) の中に書いている。これらの高山植物をファラーは「丈夫な、革のように堅い葉が地面に放射状に広がったロゼット、ガラックスのような葉、そして1ダースほどのすてきな房飾りのような釣り鐘型の花で、ローズピンクや深紅がマーブル状に入った花々をつけた高い茎、雪の中から突き刺すように生えてくるような

ソルダネラのように優美ですばらしいもの」(Farrer, 1907: 234)と描写する。

日本での高山植物との出会いをファラーは、母親への手紙で、興奮して語っている。

日本で縁取り花壇用植物(ボーダー植物)と高山植物を採集することのできる大きな可能性に私は文字通り、驚愕し呆然とした。日本は、この方面では全くの処女地であった!いくつかの日本産の植物は、時折、ヴィーチなどの園芸商によって紹介されているが、それらは大成功をおさめていて、その上、不合理な値段で売られている。これらの植物は、日本の山野の中で発見されたのではなく、東京や京都の小さな庭園の中に植わっているものだったのである。日本の地で園芸商を営んでいる英国人のアルフレッド・アンガー Alfred Unger³⁾によると、イングランドでは現在ロックガーデンが重要になりつつあるのに対して、日本では、高山植物は全く商業的な価値を認められてはいないという。今までイングランド人はだれも日本の高山植物にアプローチしたことはない。いまや、私たちは、高山植物のイングランドでの商業的価値を知っているのだ、洞察力と、——それからお金のある我々には何というすばらしいビジネスの機会がひらかれていることか!⁴⁾

(iv) ファラーの英国に流行する日本庭園に対する考え方

ファラーが最も感銘を受けた日本での日本庭園の風景は、いわゆる、池があり、太鼓橋があり、石灯籠、鳥居や茶屋があるといったような王朝風な庭園ではなかった。ファラーが、日本で夢になったのは、巧妙に配置された石や岩石が主でそれを支えるようなかたちで灌木や木々が植えられているような、いわば、石庭であった。同時に、ファラーは、広大な自然の溪谷の風景を、「3ヤード四方の」コンパクトな空間にミニチュア化して表現するという日本庭園の手法に敬意を抱いていた。

英国王立園芸協会 Royal Horticultural Society による『園芸記録』*Horticultural Record*, (1914) という冊子で、ファラーは、彼の日本庭園とロックガーデンに対する考えをはっきりと述べている。彼は英国の土地に、太鼓橋や石灯籠を配することによって日本庭園の風景をコピーするような造園法には強く反対している。ファラーは、日本庭園の風景を支えている哲学や精神を理解し、その理解に基づいたうえで造園することが最も重要だと考えていた。ファラーは東洋の哲学に非常に興味を抱いており、仏教徒に改宗したと言われている。

Ⅲ ファラーの時代の英国のガーデニング：ロックガーデンという一潮流

ファラーがロックガーデンに夢中になる20世紀初めまでに、英国のガーデニングには、ロックガーデンというスタイルが一潮流として確立していた。この章では、ファラーの時代のロックガーデンという一潮流が、英国のガーデニングの歴史の中で、どのような流れを経てきたのかという歴史的

な位置づけを試みることにする。その作業をすることによって、より明確にファラーの生涯をかけた試みであるロックガーデンの世界がどのようなものであったのか、理解できるように思われるからである。

(i) 英国のガーデニングの2つの流れ：「整形（人工）」と「非整形（自然風）」

英国の庭園の歴史を概観すると、その流れは、フランスの絶対王政時代に流行したヴェルサイユ宮殿の庭に代表されるように土地に幾何学的に植物を配するスタイルである整形式の庭と、18世紀の英国の風景式庭園が目指したような、自然な風景を模倣するような庭のスタイルの2つの流れがある。その2つのスタイルが、18世紀以降の英国において時と場合によって使い分けて現れるということができる。例えば、18世紀の貴族の広大なカントリーハウスでは、邸宅の周りや正面玄関に位置する装飾的花壇は、整形式のスタイルで色とりどりの植物が幾何学的に植栽されている。一方、邸宅から眺めることの出来る広大な地所は、装飾的な池があり、小道があり、橋がかかり、所々にクランプ（樹塊）と呼ばれる木々の茂みがあり、羊や牛が放牧されているのが遠景に見られるような風景式庭園のスタイルでデザインされている。このような18世紀の英国の風景式庭園を多く造園したウィリアム・ケントの「自然は直線を嫌う」という言葉に代表されるように、英国の庭園の歴史は、「人工」の芸術である庭園にいか「自然」あるいは「自然の風景」をデザインにとりこんでいくかという大問題に挑戦してきた。

ファラーが魅せられたロックガーデンのスタイルは、歴史的にみると、この「自然」の風景を目指す方向の庭園の流れの中に位置づけることができる。

(ii) 英国のロックガーデンの起源とピクチャレスク

19世紀後半から20世紀にかけて、英国の庭園では、ロックガーデンという造園様式が一潮流として流行しつつあった。英国の庭園史学者のブレント・エリオットによると、ロックガーデンに欠かさない装飾的な岩石の構築物が庭園につくられるようになった起源は、2つあるという。1つは、ヨーロッパのルネッサンス期の庭園によくつくられたグロット（庭園洞窟）という洞窟のような構築物であり、もう1つは、18世紀の英国の風景式庭園でよくデザインされた自然な岩山のような構築物であるという。(Elliott, 1986)

これらの2つの起源は、ともに、英国人がヨーロッパ大陸と文化交流を直接に行うことによって、英国に広がり、庭園の流行を生みだした。

歴史的にみれば、英国人にとって、ヨーロッパ・アルプスの山岳地帯は、18世紀に貴族の子弟の間で慣習となっていたグランドツアーで、必ず通らなければならない難所であった。グランドツアーとは、英国の貴族の子弟が行うイタリアのローマを主な目的地とした旅で、英国の貴族が貴族としての一人前の文化的教養を身につけ、交遊のネットワークをひろげることを目的として、多くの画家・芸術家・学者などを家庭教師としてともなう大旅行であった。そのようなグランドツアーを通じて、今まで、悪魔が住む場所として忌み嫌われていた山岳地帯は、別の視点から、見直され

た。グランドツアーに随行する芸術家や美学者によって、ヨーロッパ・アルプスにみられるような山岳の美は、崇高美（サブライム）sublime として発見されたのである。（Wilton and Bignamini, 1996; 本城、1992；レシェブルク、1999）

グランドツアーを経験した世代である18世紀以降の英国の貴族のカントリーハウスの邸宅の中は、グランドツアーで目にしたイタリアの風景の絵画で飾られた。カントリーハウスの庭園では、グランドツアーで見たイタリアの風景の一部を実際に再現することが流行した。彼らは、イタリアで見た廃墟を模した建造物を新しく建て、山岳の岩山のサブライムの風景を小規模に庭園に再現した。（Soane Gallery, 1999）

また、このグランドツアーによって訓練された視線で、英国の自然の風景をみつめるうちに、サブライムよりも、小規模な新しい美意識であるピクチャレスク Picturesqueという概念が生まれた。英国の美学者ウヴェデイル・プライス Uvedale Priceによると、ピクチャレスクとは「荒々しさ、複雑さ、不規則性を特徴とする小規模な風景で鋭い対照と多様な色合いに満ちたもの」だと定義される。ピクチャレスクとは、文字通りには「絵画美」であるが、その絵画とは、クロード・ロラン Claude Lorrain が描いたような、神秘的で、聖書や神話などの舞台になりそうな「心たのしい恐怖感」（川崎、1991：83）をさそうような絵画のことである。そして、このような風景をさがして英国中を歩くピクチャレスク・トラベルが英国の文化人の間で流行した。（川崎、1991）ピクチャレスクな風景を作り出すような、地所の管理が英国の富裕層の地主の間で流行した。（Daniels and Watkins, 1991）

歴史的にみると、ファラーのロックガーデンの目指した風景もこのような文脈に深く関わっていると位置づけることができる。

（iii）ファラーと同時代のロックガーデンへの関心：高山と高山植物

もともとは、ロックガーデンの起源は、エリオットも述べるように岩や石による岩山の構築物であり、そこに植物を植えることは、はじめはあまり重視されていなかった。初期のロックガーデンの傑作だと同時代の園芸家のウィリアム・ロビンソン William Robinson が絶賛したサー・フランク・クリスプ Sir Frank Crisp の地所フライアー・パーク Friar Park（ロンドン近郊ヘンリーオンテムズ）に造園されたマッターホルンを模した造形のあるロックガーデンでも、岩石による山の造形が際だって見える。

とはいえ、温室で育てる外来種だけを愛でるのではなく、耐寒性がある英国の野外に適応できるような外来種を英国の庭に植えて美しい風景を作り出していこうという考え方の『ワイルド・ガーデン』*Wild garden or, our groves and shrubberies made beautiful*（1870）を提唱したウィリアム・ロビンソンも高山植物には、非常に興味を持っており、高山植物についての著作『イングリッシュガーデンのための高山植物』*Alpine flowers for English gardens*（1870）を執筆している。

山岳への美的な嗜好はもっと広く当時の社会にあったと思われる。英国人のアルプスへのツーリズムが盛んになり、美術評論家・社会改革者のジョン・ラスキン John Ruskin が山岳の美につい

ての著作を多く執筆し、社会に影響を与えたのも同時代である。(Hewison, 2000)

ファラーのロックガーデンも、彼の故郷のヨークシャーデールの山岳風景への深い愛と共感とともに、ラスキンのような同時代の知識人のうちに一般的に広がっていたような、山岳の美への嗜好、高山植物への関心を共有していたと考えられる。

ファラーは、20世紀の初期に3冊のロックガーデンに関する著作を発表した。『私のロックガーデン』*My Rock-Garden* (1907)⁵⁾、『ロックガーデン』*The Rock-Garden* (1912)⁶⁾そして、『イングランドのロックガーデン』*The English Rock-Garden* (1919)⁷⁾の3冊である。この3冊の著書を通じて、ファラーの功績を考えると、ロックガーデンに高山植物を植えることでより豊かなロックガーデンをつくろうとしたことである。ファラーの提唱するロックガーデンとは、その土地

に由来をもつ岩石を組み合わせ自然の溪谷（グレンやモレーン）にみえるような構築物をつくり、その石や岩を組み合わせたときに、その間にできる隙間に土を入れ、そこに植物をバランスよく植えるといったスタイルのガーデニングである。ロックガーデンとしてつくられる岩石の構築物は、ただ、岩石を置けばいいのではなくて、ピクチャレスクなスタイルでなければならない。

また、そこに、植えられる植物は、必ず、岩山のあるところに自生している高山植物でなければならない。だから、ロックガーデンは、高地や山岳地帯が美しいと思う気持ちと、その場所に自然の植生として生えている植物への強い興味・探求によって支えられている造園様式である。

それとともに、ファラーのロックガーデンは日本を含む東洋の庭園に伝統的にみられる石組みによる造形にも影響を受けており、東洋の豊富な高山植物にも魅せられていた。

19世紀後半から、20世紀にかけて多くの人がロックガーデンの造園に取り組んだが、どのような岩組がその時代のロックガーデンとして美しいのかについて、皆で激しく論争した時代であった。(Elliott, 1986; Elliott, 1991)

ファラーは、一般に流布しているが、ロックガーデンとしてあまりよくないかたちとして、「アーモンド・プディング型」、「犬の墓型」などをあげた。一方、ファラーが一番美しいロックガーデンだと主張したのは、自然のグレン（溪谷）のようなロックガーデンであった。

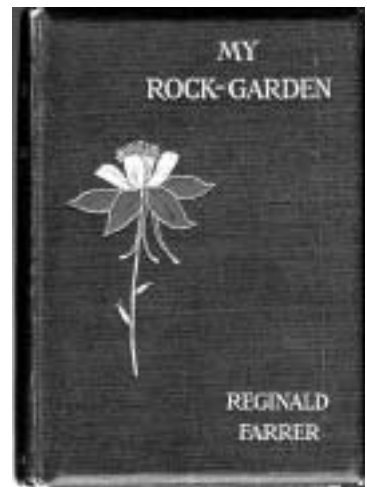


写真3: Reginald Farrer『私のロックガーデン』*My Rock-Garden* (1907)の表紙

IV レジナルド・ファラーとイングルボロー屋敷の地所の環境管理

(i) はじめに：ファラー家とイングルボローの地所

ファラーの故郷、クラップム村の周辺のイングルボロー高地は、18世紀にファラー家が地所を購

入した頃には、すでに、その石灰岩のおりなす特異な景観と高山植物の植生で有名だった。19世紀初期にはイングルボロー屋敷の地所は、ピクチャレスクのスタイルで景観管理された。湖に沿った森の中の散歩道は、鍾乳洞まで続き、鍾乳洞を見るために観光客がおとずれるようになっていた。

レジナルド・ファラーの父親のジェームズ・アンソン・ファラー James Anson Farrer (1849–1923) は、進歩的な地主で、湖の水を使って水力発電を行い、地所に商業的植林を大規模に行い、地所から多くの収益を得られるように改革した。クラップム村はイングランドの北西部で、最初に電燈がともった村であったといわれている。1833年にクラップム・ベックは、せきとめられて湖（ダム）となり、1847年には、湖の水を利用した水力発電のタービンが取付けられた。さらに、1896年には変電設備が完備されることで、クラップム村中のどの家にも電気による灯りが1つ供給された。ジェームズ・アンソン・ファラーは、自由主義者で、反帝国主義者として知られており、文化、宗教、民族性についての比較研究の著作を執筆した。将来この父親の跡を継ぎ、地所を相続する運命にあったレジナルド・ファラーは、父親の考え方に大きく影響を受けて育った。(Mason, 1991)

しかし、レジナルド・ファラーの園芸への情熱は、金銭的にも空間的にも彼の両親の許容範囲を超えることになった。レジナルド・ファラーは度重なる東洋への植物採集旅行に夢中になり、跡を継ぐはずの地所を留守にすることが多くなり、また、イングルボロー屋敷の地所で彼が経営していた園芸商クラヴァン・ナサリーは営業的には成功しなかった。レジナルド・ファラーは、父親のように、地所の経営的成功を考えて、商業的植林をするのではなく、東洋から集めてきた高山植物を地所に植えることに夢中だった。両親の心配と干渉に対して、1910年に、レジナルド・ファラーは「あなた方には、14000エーカーも自由になる土地があるでしょう、その中の2エーカーぐらい私の自由に任せてくれてもいいではないか！」⁸⁾ と両親へ手紙で書き、悲痛な叫びをあげていた。(Illingworth, 1991)

この章では、レジナルド・ファラーが、故郷のイングルボロー屋敷の地所の管理で目指していたことは何なのか考察する。

(ii) イングルボロー屋敷にファラーが創作した新旧2つのロックガーデン

彼の著書 *My Rock-Garden* (1907) には、ファラーが故郷のイングルボロー屋敷の地所に創作した2つのロックガーデンについて語られている。これらは、それぞれオールドロックガーデンとニューロックガーデンと呼ばれている。オールドロックガーデンは、屋敷にある石切場の跡地につくられた。ニューロックガーデンは、屋敷のキッチンガーデンのあった場所につくられ、そこに彼のクラヴァン・ナサリー（園芸商）を置いた。これらの、2つのロックガーデンの土は、対照的であった。それが、全く違うスタイルのロックガーデンを生み出した。オー



写真4：「オールドロックガーデン」の写真。出典 Reginald Farrer (1907) *My Rock Garden*. Edward Arnold. London

ルドロックガーデンの土は、痩せていたのに対して、ニューロックガーデンの土は肥沃だった。

両者とも、イングルボロー高地から運んできた石灰岩の大きな岩が運び込まれた。オールドロックガーデンでは、運び込まれた大きな岩は、小さなミニチュア化されたグレン（溪谷）を形造り、高山植物が植えられ、池がつくられた。後に、池は、湿地に造り替えられアイリス類が植えられた。ニューロックガーデンでは、4つの大きな石を配置し、肥沃な土の上に石の破片を突き刺して、排水路をつくり、ゴージ（両側が絶壁の峡谷）の風景をつくり出した。

いずれのロックガーデンにおいても、ファラーのロックガーデンで最も大切であったのは、ヨークシャーデールからとれる固有の石灰岩の岩と高山植物との組み合わせである。

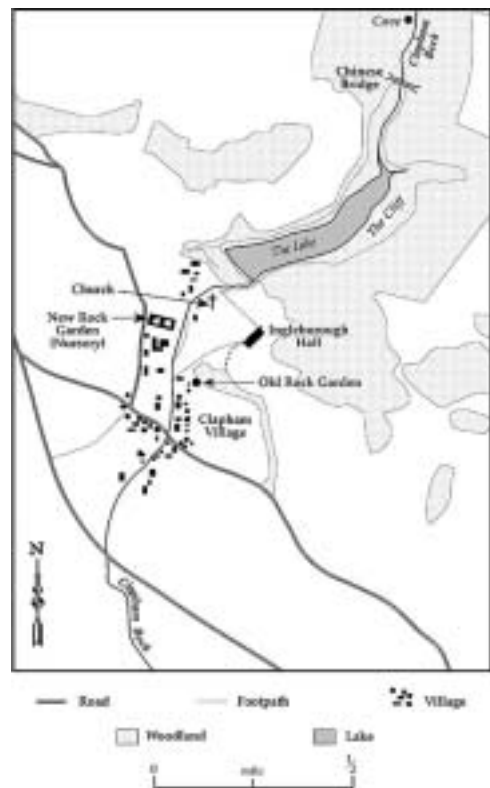
（iii）イングルボロー屋敷の地所でファラーが行った環境管理

彼の著書『私のロックガーデン』 *My Rock-Garden* (1907) には、彼が収集したエキゾチックな高山植物を、イングルボローの地所の石灰岩の地質に植えることによって、いかに「自然な」ロックガーデンの風景を創造したのかが語られている。『私のロックガーデン』 *My Rock-Garden* (1907) にある「ホテアツモリ」 *Cypripedium macranthum* の写真は、ファラーが日本の富士山付近で採集したこの高山植物を彼の故郷イングルボロー屋敷に植え、どのようにロックガーデンの風景を創り出したのかを端的に表している。

また、イングルボローの地所にある南西から北東に細長く延びている湖の中程当たりの北側は、地質学的にはクラヴァン断層が横切っていて、酸性の土壌の小さな外座層がある。その部分に、ファラーは、ヒマラヤから持ち帰ったシャクナゲ類やツツジ類など酸性の土壌を好む植物を植えている。

彼のロックガーデンは、彼が集めてきたエキゾチックな植物の適性に基づいて植える場所を選ぶのに細心の注意を払い、その地質、環境の細部の観察に基づいていた。

もう一つの例は、イングルボローの地所の中の「クリフ」（崖）とよぶ場所をどのように管理したかに語られている。クリフは、湖に面した切り立った崖でボートでしか、そこに近づくことができない。現在の地主である Dr ジョン・ファラーは、「レジナルドは、ショットガンの中に種をつめて、ボートに乗って、クリフに向かって、放射して、種をまいた。」と語っている。⁹⁾



地図1：イングルボロー屋敷の地所、クラッパム村（ヨークシャー）

この話は、ファラーが、どのように、そこに存在する自然の風景を、「改良」improvement するために試みたかについて物語っている。また、このクリフは、ファラーにとって、たくさんの高山植物を「自然に」近い方法で移植して、自然の風景を「改良」することによって、自然なロックガーデンをつくる、理想的な魅力のある場所であったといえる。

このファラーのイングルボローの地所での試みはその地域の環境に適したエキゾチックな植物を植えて風景の「改良」をめざした、ハイブリッドな庭園と捉えることができる。(Tachibana et al, 2004)



「ホテイアツモリ」の写し。写真には「日本から到着してから3ヶ月後」と記されている。出典：Reginald Farrer (1907) *My Rock Garden*. Edward Arnold. London

写真5：「ホテイアツモリ」の写真。写真には「日本から到着してから3ヶ月後」と記されている。出典：Reginald Farrer (1907) *My Rock Garden*. Edward Arnold. London

V おわりに：ファラーのロックガーデンの現代性

ファラーのロックガーデンは、自然の風景を目指すような庭園観に位置づいているが、ファラーは、造園における自然という概念について次のように述べている。「規則性のない荒野（ウィルダネス＝人間の手の全く加わっていないという意味をもつ）は混沌（カオス）である。」(wildness without law is chaos.) これは、ファラーが、ロックガーデンをつくることにおいても、岩石が「自然」の配置に見えるように手をつくすということが重要だといっている。「庭園におけるそのままの「自然」は、他の言葉では、怠惰、無知、無茶であり、庭園でも何でもない。……庭園は、芸術による創造物である。芸術は自然と本当に統合されている。それは丘陵や森林の構築物をつくりだしているのと同じような規則によって治められなくてはならない。」(Farrer, 1914: 13)

このような視点からも、ファラーは、日本の石庭のシンボリックな宇宙観ともつながるような規則性に基づいた配置に感銘を受けたと考えられる。

実際に、100以上がつくられたという英国で造園された日本庭園は、日本産の植物である紅葉や竹が植栽され、大きな池や流れがあり、たくさんの石灯籠や太鼓橋、八つ橋、茶室や鳥居などの建造物の配置からなるような日本庭園が多かった。(Conway, 1988; Herries, 2001)

ファラーのロックガーデンは、20世紀の初めに英国で大流行した日本庭園の流れの中で見ると、少数派であった。多くの英国の日本庭園が行ったように、ファラーは、日本庭園に見られるような風景をそのままコピーしたのではない。日本で出会った日本庭園の岩石の岩組みの手法とそれによって再現されるような自然の風景のヴィジョンに触発されて、ファラーはロックガーデンをつくったのである。それは、日本庭園の風景との出会いを出発点として、ファラー独自のヨークシャーデールの土地の環境に基づいたガーデニングであり、日本と英国の文化接触によって、新たに創造された、いわばハイブリッドな庭園だと考えられる。

現在の視点から見ると、ファラーの著作の園芸界へのもっとも大きな貢献のひとつは、ロックガーデンという岩石の組み合わせと高山植物から構成される造園様式を確立し、ロックガーデンを建築ブームになりつつあった郊外住宅にもおさまるようなサイズとスタイルに大衆化させたことである。現在では、英国の多くの郊外住宅のバックガーデンには、手作りのこぢんまりとしたロックガーデンがよく見られる。ファラーの提唱したロックガーデンのスタイルは、郊外住宅の庭において、整形の要素の強い花壇にとって代わるような可能性があった。

ニコラ・シュルマン Nicola Shulman は、レジナルド・ファラーの最新の伝記である『ロックガーデンに魅せられて』*A Rage for Rock Gardening* (2002) において、「彼のすばらしい数々の著作の影響は、イングランドのガーデニングの全てを……永久に変える力を持っていた」と評している。(Shulman, 2002)

現在、イングルボロー屋敷の地所は、ヨークシャーデール国立公園の中に含まれている。英国の国立公園 National Park は、多様な野生動物が生息する自然保護区ではなく、その中には、私有地が多く含まれており、農業や放牧が行われている人間の生活空間でもあることに特徴がある。イングルボロー屋敷の地所のあるクラップム村には、ヨークシャーデール国立公園によってたてられた、クラップム村について説明する看板がある。そこには、イングルボローの歴史や地質・動植物の多様な生態の説明と並んで、レジナルド・ファラーの顔のイラストも描かれている



写真6：「ヨークシャーデール国立公園によってたてられた、クラップム村について説明する看板・レジナルド・ファラーの顔のイラストが描かれている」出典：筆者撮影。

る。現在でも、植物学者レジナルド・ファラーの功績がクラップム村ではたたえられている。ヨークシャーデール国立公園は、『イングルボロー地所散歩』*Ingleborough Estate Trail* という約5キロメートルの散歩コースのパンフレットを発行している。このパンフレットでも、レジナルド・ファラーが植えた、東洋原産の植物について、紹介している。これらは、レジナルド・ファラーが行った、地所の「改良」の結果であり、ハイブリッドな自然の風景の庭を造ろうとした試みの成果である。現在も、レジナルド・ファラーが日本から移植したと伝えられる紅葉の木や、彼がヒマラヤから採集してきて植えたという、24種類にもおよぶ見事なシャクナゲ類をイングルボロー屋敷の地所の中の湖の畔に沿った遊歩道を歩くと見ることができる。

注

- 1) 石臼（ミルストーン）に利用された砂岩である。
- 2) 横浜開港資料館編（1996）『世界漫遊家たちのニッポン：日記と旅行記とガイドブック』には、当時の世界漫遊旅行者用につくられた、ガイドブックや日本を訪れた西欧人旅行者の刊行した旅行記が紹介されている。この図録には、「英米人旅行者とその旅行記」（p.47-8）と題する詳細な日本旅行記の一覧表がある。

しかし、レジナルド・ファラーは、ここには収録されていない。

- 3) Alfred Unger は、林学者であり、当時日本で Boehmer's Nursery Company の経営をしていた。
- 4) Illingworth, John (1991) 'The correspondence of Reginald Farrer' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener* University of Lancaster (p.74) に引用されている手紙による。日本語訳は筆者による。
- 5) この本は、ファラーの著作のうちで最も人気があった。1907年12月、1909年3月、1911年1月、1913年9月、1920年2月、1927年5月に版が重ねられた。異なったデザインの版が1927年に刊行され1930年に再版された。'A bibliography of the books and contributions to periodicals written by Reginald Farrer.' in E.H.M. Cox, *The plant introductions of Reginald Farrer*. (1930)の書誌情報による。
- 6) 前書きが J.Bretland Farmer (p.vii, viii) によって書かれる。これは、『今日のガーデニングシリーズ15巻』 No.15 of the "Present -Day Gardening" seriesである。
- 7) 2巻本。高山植物についての百科事典的記述である。
- 8) Illingworth, John (1991) 'The correspondence of Reginald Farrer' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener* University of Lancaster (p.76) の引用による。実際には、1851年の時点でファラー家が所有していた土地は、2550エーカーで、クラップム村の総面積の約4分の1にあたった。クラップムの総面積は、11424エーカーである。土地利用の内訳は、130エーカーが耕作地、4870エーカーが放牧地または採草地、400エーカーが森林、6000エーカーがムーア（原野）で、24エーカーが道路であった。Mason, Sara 'The Ingleborough estate: home of Reginald Farrer' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener* University of Lancaster による。
- 9) 筆者は、1997年8月、1998年6月、2001年5月の3回にわたりクラップム村のイングルボロー地所を訪れ、現地調査を行った。現在の地主である Dr John and Mrs Joan Farrer ご夫妻には、丁寧にイングルボロー地所の中を案内していただき、レジナルド・ファラーのことや、現在のイングルボローの地所管理について、貴重なお話を伺った。ご夫妻に感謝申し上げます。

参考文献

- Conway, Judith. (1988) *Japanese Influences on English Gardens*. Unpublished thesis submitted for Architectural Association, Conservation of Gardens Course.
- Cox, E.H.M. (1930) *The plant introductions of Reginald Farrer*. Privately Printed.
- Daniels, Stephen and Nash, Catherine (2004) 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical Geography* 30-3 (449-458).
- Daniels, Stephen and Watkins, Charles (1991) 'Picturesque landscaping and estate management: Uvedale Price at Foxley, 1770-1829' *Rural History* 2 (141-169).
- Elliott, Brent. (1986) *Victorian Gardens*. A Batsford Book.
- Farrer, Reginald J. (1904) *The Garden of Asia: Impressions from Japan*. Methuen & Co. London.
- Farrer, Reginald. (1907) *My Rock Garden*. Edward Arnold. London.
- Farrer, Reginald. (1918 (1930)) *The English Rock-Garden*. T.C. & E.C.Jack, Ltd. London.
- Farrer, Reginald. (1905) 'Japanese plants and gardens. Lecture given on May 9, 1905' in *Journal of the Royal Horticultural Society*. (p.12-17)
- Farrer, Reginald (1908) *In Old Ceylon*. Edward Arnold. London.
- Farrer, Reginald (1911) *Among the Hills*. Headly Brothers. London.
- Farrer, Reginald (1912) 'On Japanese gardens' *The Gardeners' Chronicle*, 2 November 1912.
- Farrer, Reginald (1913) *The Dolomites*. Adam and Charles. London.
- Farrer, Reginald. (1914) 'Rock gardens and garden design' in R.Cory (Eds.) *The Horticultural Record*, London. (3-18)
- Fisher, F.H. (1932) 'Reginald Farrer, author, traveler, botanist and flower painter' *Alpine Garden*

Society's Bulletin 1-10 (1-38).

- Fitzherbert, Margaret (1983) *The man who was Greenmantle: a biography of Aubrey Herbert*. John Murray.
- Herries, A (2001) *Japanese Gardens in Britain*. Shire Publications.
- Hewison, Robert et.al (2000) *Ruskin, Turner and the Pre-Raphaelites*. Tate Gallery Publishing.
- Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster. (Centre for North-West Regional Studies: Occasional Paper no.19)
- Illingworth, John (1991) 'The correspondence of Reginald Farrer' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster.
- Lievre, Audrey le. (1991) 'Travelling Eastward: Farrer's journeys described' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster.
- Mason, Sara 'The Ingleborough estate: home of Reginald Farrer' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster.
- Ottewill, David. (1989) *The Edwardian Garden*. Yale University Press.
- Roberts, Jeremy (1991) 'Alpine plants of the Ingleborough area' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster.
- Robinson, William (1870) *Wild garden or, our groves and shrubberies made beautiful*. John Murray.
- Robinson, William (1870) *Alpine flowers for English gardens*. London.
- Shulman, Nicola (2002) *A rage for rock gardening: the story of Reginald Farrer, gardener, writer and plant collector*. Short Books.
- Soane Gallery (1999) *Vision of ruin: architectural fantasies & designs for garden follies*. Sir John Soane's Museum.
- Stearn, William T. (1991) 'An introductory tribute to Reginald Farrer' in Illingworth, John & Routh, Jane eds. (1991) *Reginald Farrer: Dalesman, Planthunter, Gardener*. University of Lancaster.
- Tachibana, Setsu, Daniels, Stephen and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30-2 (364-394).
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, plants, and cross-cultural landscapes: British Representation of Japan, 1860-1914*. Unpublished PhD thesis, University of Nottingham.
- Wilton, Andrew and Bignamini, Ilaria eds. (1996) *Grand Tour: the lure of Italy in the eighteenth century*. Tate Gallery Publishing.
- Yorkshire Dales National Park (1996) *Ingleborough Estate trail*. Yorkshire Dales National Park Authority.
- 川崎寿彦 (1991) 『楽園のイングランド：パラダイスのパラダイム』河出書房新社
- 小泉武栄 (2001) 『登山の誕生』中公新書
- 白幡洋三郎 (1994) 『プラントハンター：ヨーロッパの植物熱と日本』講談社
- 本城靖久 (1992) 『グランド・ツアー：英国貴族の放蕩修学旅行』中央公論社
- ヴィンフリート・レシェブルク (林龍代・林健生訳) (1999) 『旅行の進化論』青弓社
- 横浜開港資料館編 (1996) 『世界漫遊家たちのニッポン：日記と旅行記とガイドブック』横浜開港資料館

英文要旨

Garden, life and geography: English botanist, Reginald Farrer's Japanese journey and estate management at Ingleborough Hall, Yorkshire.

Setsu Tachibana

This paper explores lifehistory/lifegeography of English botanist, Reginald Farrer (1880-1920). Farrer encountered Japanese gardens in Japan in 1903 and wrote *The Garden of Asia: Impressions from Japan* in 1904. I discuss this work in relation to his general ideas about rock gardens: *My Rock Garden* (1907). He had been greatly influenced by his encounter with Japanese gardens in Japan, where he developed his idea of rock gardens. I explore the landscape management of Reginald Farrer's home at Clapham, Ingleborough, Yorkshire. I consider how Farrer's ideas on rock gardens may be seen as the creation of a "hybrid" garden, while the main stream of Japanese gardens at the age of fashion in Edwardian Britain is the introduction and copy of an "authentic" Japanese garden. Farrer was not interested in copying Japanese garden design, rather he was interested in creating "natural" rock gardens using exotic alpine plants in the British environment. His ideas of rock garden and his estate management around Clapham village can be seen as an attempt to create a "hybrid" landscape garden in Britain.